

令和 5 年 6 月 4 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00094

研究課題名（和文）宗教者の寄り添い支援とそれに関わる研究者及び研究の公共性に関する研究

研究課題名（英文）Research on publicness of support activities of religious people, related researchers and research itself

研究代表者

宮本 要太郎（Miyamoto, Yotaro）

関西大学・文学部・教授

研究者番号：10312779

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：近年、一方で、苦の現場において実践に取り組む宗教者と、それを研究対象にする研究者との協働の機会が増え、他方で、「宗教」研究の中立性が自明のものではなくなってきて、宗教研究そのものの「公共性」や研究者の立場性、さらに宗教（研究）のアドボカシーについて議論する機は熟したといえる。宗教（者）が、社会を超越した地平と関わりながら同時に社会に関与していくという、内に葛藤を抱えた営みと格闘している以上、その研究もまた、その葛藤を創造的に捉える視点を内包した解釈学的な営為とならざるをえない。この困難性を自覚的に引き受けながら「現場」と関わっていくことによってのみ「公共宗教学」の可能性が開かれよう。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は大きく分けて、宗教者と研究者の協働活動の成果と課題を検証的に明らかにしたこと、さらに、そこから浮かび上がってくる宗教の「公共性」および宗教研究の「公共性」について、また、宗教（研究）におけるアドボカシーに関して、理論的に考察したこと、にある。これらの成果を通じて、これまで日本の宗教研究においてはほとんど等閑視されてきた（宗教）擁護論の問題を正面から取り上げるとともに、研究者の立場性も視野に入れた宗教研究の公共性を論じることができたが、その点で宗教研究の新たな地平を開拓することが大いに期待できる。また、これらの試みは、「公共宗教学」のテーマに先鞭をつけることにもなる。

研究成果の概要（英文）：In recent years, on the one hand, there have been increasing opportunities for collaboration between religious practitioners who work in the field of suffering and researchers who conduct research on them. Therefore, it can be said that the time is ripe to discuss the “publicness” of religious research itself, the positionality of researchers, and the advocacy of religion (research). As long as religions (religious practitioners) struggle with activities that have internal conflicts between society and the horizon that transcends society, the research on them must be a hermeneutic activity. The possibilities of “the public study religion” can be opened only by consciously accepting this difficulty and engaging with the “field.”

研究分野：宗教学

キーワード：宗教の公共性 公共宗教学 アドボカシー（擁護） 宗教的ケア 宗教者の寄り添い支援 宗教者の社会参画

1. 研究開始当初の背景

20 世紀後半の宗教研究におけるパラダイム転換のひとつは、明らかに「世俗化論」から「宗教復興論(再聖化論)」へのそれであった。すなわち、イスラム革命や福音派キリスト教の政治への積極的介入などに見られるように、社会の表舞台から徐々に引退していくと見られていた宗教が、再び社会変革の原動力としてのポテンシャルティを示し始めたのである。ただし、「無宗教」がマジョリティとなっている日本社会は、そのような潮流とは無縁と思われていた。しかし、1996 年に Christopher Queen と Sallie King の共著で *Engaged Buddhism* が出版され、積極的に「社会参画」する仏教運動に対して欧米で注目が高まると、日本でも「宗教の社会貢献活動」に関する研究が本格化した。研究の中心的な視座のひとつは、「ソーシャル・キャピタル(社会関係資本)」として宗教を捉えるものであり、その成果は、『叢書 宗教とソーシャル・キャピタル』シリーズ(全4巻、2012-13年)などに結実している。

一方、地縁・血縁および「社縁」が弱体化して多数の「孤人」を生み出している現代日本の状況は「無縁社会」という言葉で現前化されたが、その事実は同時に、伝統的に地域社会(地縁)によって支えられてきた神道と、檀家(血縁)に多くを依存してきた仏教とが、ともに衰退の危機に瀕している現状を認識させるものでもあった。それゆえ「無縁社会」化は、孤独死のリスクを抱えた人々だけでなく、伝統宗教にとっても(さらに「家の宗教化」が進む新宗教においても)深刻な問題として受け止められるものであり、したがって「無縁社会における宗教の可能性」は喫緊の研究課題でもあった(科研費(基盤研究(C))平成23年度~25年度「無縁社会における宗教の可能性に関する調査研究」)。

その後、研究代表者は、ホームレスや単身高齢者、移民や少数民族、また性的マイノリティなどの社会的孤立者に対して積極的にアウトリーチしていく宗教者、とりわけ伴走型支援活動に従事する宗教者たちの実態を調査し、台湾や韓国の事例との比較を交えながら、宗教(宗教者、宗教団体、宗教的価値観・倫理観、宗教文化)が現代社会で果たしうる役割についてさらに掘り下げて考察した(科研費(基盤研究(C))平成28年度~30年度「日台韓における社会的孤立者に対する宗教者の伴走型支援活動に関する調査研究」)。

その研究において大きな課題として浮上してきたのが、宗教の「公共性」の問題であり、同時に研究者の側の「公共性」ないし「立場性」の問いであった。寄り添い支援を行う宗教者の実践は、「宗教の公共性」に対する問いと切り離せない。この問題は、すでに「公共宗教(public religion)」に関する議論として、ホセ・カサノヴァの『近代世界の公共宗教』(1997年。原著は1994年)によって先鞭をつけられ、日本でも、津城寛文『公共宗教の光と影』(2005年)、島藺進、磯前順一編『宗教と公共空間 見直される宗教の役割』(2014年)、磯前順一、川村覚文編『他者論的転回 宗教と公共空間』(2016年)を始め、多くの研究が生み出されている。

このように、公共宗教、あるいは宗教の公共性という用語が宗教学界で使用されるようになって久しい。しかしそれらの研究には、いまだ欧米の宗教学からの輸入概念の残滓が間々見られ、現場の宗教者の実践領域でどこまでこれを用いて表現できるか、実証的検証が必要になってこよう。その一方で、無縁社会での人と人とのつながりを支えていく営み(支縁)として、結縁や絆という言葉も現場ではさまざまに用いられている。また、公共性という語の用い方の立場性にも十分留意する必要がある。宗教者の社会貢献が、教団組織や社会一般、また為政者によって無償の労働力と読み替えられてしまえば、公共性の概念が歪められたものになりかねない。これらについて問題の枠組みから整理し検討し直す必要も感じていた。

さらに、宗教研究ないし研究者の公共性についての議論は、少なくとも日本においてはほとんどなされていない。隣接諸学においては、たとえば「公共人類学」や「公共民俗学」を巡って、すでに一定の議論が展開されているが、「公共宗教学」についてはほとんど話題にもならない。しかし、宗教者と研究者の関係は、単に研究の客体と主体という固定的な関係に限定されず、とりわけ支援の実践の現場においては、研究者が支援に関与したり、宗教者が研究課題を提示したりするなど、さまざまな形で相互に補完し合う関係性がしばしば現出するのであって、そのような状況においては「対象から距離をとった中立的な参与観察」はもはや不可能である。

むしろ、宗教者の支援の「公共性」を論じることそれ自身が、すでに一定の価値判断を含んでおり、したがってしばしば宗教研究者による擁護的研究にならざるをえない。すなわち、2014年に雑誌 *Religion*, Vol.44, No.2 において特集が組まれたように、「Advocacy (擁護)」の問題を無視できないのである。だとすれば問われるべきは、「いかにして価値中立性を維持するか」ではなく、「立場性を意識化しながらいかに『擁護』するか(ないししないか)そしてそのことに対してどのような正当性を付与するのか」であろう。アドボカシーにはまた、「提言」の意味もある。苦の現場に取り組む宗教者の実践に関して、政教分離の名のもとに、その公共性が正当に評価されていないと感じられる場合などは、研究者が(宗教者に代わって)社会に向かって提言を行う必要も出てくる。

公共性という言葉自体は、社会に役立つ、貢献するという文脈の中で、しばしば使用されるが、宗教(者)の場合も災害救援や社会福祉の分野で役立ち、貢献するという意味で用いられがちである。しかし、宗教本来の役割は、超越的な存在(神仏)を信仰することによって、この存在に繋がり、心や魂の救いを得ることにある。現場の宗教者たちは、そのことを自覚しながら、いま現在の生活上の苦しみを生きる人々に対する支援に関わっているのであり、そうした支援をしながらも、心魂の救済と生活の救援との間で葛藤している。したがって、そのような葛藤の宗教的意味こそが解釈されなければならない。そこから求められる宗教研究の方法には、ポスト・ヒューマニズムを見据えた「新しいヒューマニズム」を提唱する解釈学的宗教学がとても参考になる(リチャード・ガードナー、村上辰雄編著『宗教と宗教学のあいだ 新しい共同体への展望』(2015年))。そして同時に、宗教研究者が実践の現場における宗教者の語りを聴き取り、また宗教者とも意見を交換し、さらには実際に現場の支援活動に協働するなど、インタラクティブな活動を行うアクションリサーチも欠かせない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、上記のふたつの科研で得られた知見を活かし、そこで明らかになった諸課題について、発展的に研究を継続・展開することである。その課題とは具体的に、宗教者と研究者の協働活動の成果と課題を検証的に明らかにすること。そこから浮かび上がってくる、宗教の「公共性」および宗教研究の「公共性」について、さらに宗教(研究)におけるアドボカシーに関して、理論的に考察するための枠組みを構築すること。実践の現場や政策に対して、宗教研究の立場性を考慮に入れながら具体的な提言を試みること。以上3点に大きくまとめられる。

また、これまで日本の宗教研究においてほとんど等閑視されてきた(宗教)擁護論の問題を正面から取り上げるとともに、研究者の立場性も視野に入れた宗教研究の公共性を論じることで、宗教研究の新たな地平を開拓することも大いに期待できる。さらに、これらの試みは、「公共宗教学」のテーマに先鞭をつけることにもなる。

3. 研究の方法

1) これまでの宗教者と宗教研究者の共働活動の検証的研究

本研究のメンバーはこれまで、支縁のまちネットワーク、宗教者災害支援連絡会、大阪希望館、羽曳野希望館、金光ウレシパの会、そのほか教団付置研究所懇話会や WCRP 日本委員会などに関わってきている。それらの現場において、これまで宗教者と宗教研究者とがどのような立場性に立脚して共働活動を行ってきたか、宗教の社会貢献や宗教間対話、平和問題への寄与など、それぞれの歴史と現状の成果を検証して、実証的に研究した。

2) 宗教(研究)における公共性およびアドボカシーに関する基礎的研究

公共宗教、あるいは宗教の公共性という用語、また結縁や絆という言葉がどの程度、宗教の公共性を反映したものなのか、さらにはそもそも公共性の概念について、今一度、宗教学プロパーから洗い直してみる必要がある。また、宗教(研究)におけるアドボカシーの問題について論点を整理し、理論的な枠組みの構築を図った。これらは宗教学文献の基礎的・理論的研究にあたる。

3) 宗教学からの現場や政策に対する提言的アプローチからの実践的研究

これからの時代には宗教研究(者)が公共性をめぐる議論や実践の場において、諸々の提言や改善策を提示していくことが求められる。上記の1、2のそれぞれ検証的研究、基礎的研究を踏まえつつ、研究者と宗教者との共働をより充実したものにするため、具体的な提言(擁護)を試みた。

4. 研究成果

令和元年度は、(1)国内での実態調査(フィールドワーク)(2)合宿形式の研究会での意見交換、(3)学会やシンポジウム・講演等での情報収集と研究成果の発表などを実施した。

まず、(1)については、釜ヶ崎のまち再生フォーラム事務局長のありむら潜氏をお招きし、釜ヶ崎(あいりん地区)の歴史、労働者数の変化、労働者の暮らしのあり方などについてレクチャーを受けたのち、「釜ヶ崎」の現地調査を実施して、釜ヶ崎において実施されてきたホームレスや独居老人に対する寄り添い支援の現状や課題について理解を深めた。また、支縁のまちネットワークの協力を得て大阪希望館が主たる事業主となって立正佼成会豊中教会内に開設した「シェアハウスこうじゅ」の取組みにおける、「社会的孤立者に対する宗教者の伴走型支援活動」に関しても、複数回にわたって現地での調査を行った。

次に、(2)に関しては、関西大学セミナーハウスの飛鳥文化研究所において、合宿形式の研究会を実施した。研究代表者および研究分担者3名に研究協力者3名も加わって、当科研の構成メンバー全員で、研究代表者による発表「公共宗教論から公共宗教学へ」および研究分担者の平良直の論文「宗教学の公共性 「公共宗教学」は可能か」をめぐって、多角的に議論を重ね、問題意識を共有するとともに、改めて研究課題を確認した。

最後に、(3)に関しては、研究論文6件、学会等での口頭発表7件(うち国際学会4件)、図書(分担執筆)3件をはじめ、各方面において研究成果を発表した。

令和2年度は、(1)国内での宗教者の寄り添い支援とそれに関わる研究者及び研究の公共性に関する実態調査(フィールドワーク)(2)情報収集ならびに理論研究、(3)パネル形式での研究会の実施、(4)学会やシンポジウム・講演等での研究成果の発表や意見交換を実施した。

まず、(1)については、研究協力者の協力により、6月(岩手県釜石市や大槌町、陸前高田市)および10月(福島県浪江町、南相馬市、飯舘村などと宮城県名取市、山元町など)の2度にわたり、東日本大震災被災地での実態調査を実施し、被災者・住民に様々な支援やケアをして来た宗教者たちが、震災の発生から10年を経てもなおその取り組みを継続している実態を把握できた。それ以外の調査については、間接的な聞き取りなど、残念ながら不十分なものとどまらざるを得なかった。

次に、(2)に関しては、とくに新型コロナウイルス感染症の影響をはじめ、宗教者の寄り添い支援の現状に関する情報を収集してそれらの分析を行い、また、日本・韓国・台湾を中心に、社会と宗教の関わりを多角的に論じ、有効な理論の構築に努めた。

(3)については、研究協力者の北村敏泰氏の著書『揺らぐいのち』(晃洋書房、2020年11月発行)の合評会をパネル形式で実施し、生老病死の現場に寄り添う宗教者たちの活動をめぐって、積極的な意見交換を行った。

最後に、(4)に関しては、研究論文10件、学会等での口頭発表3件、図書(分担執筆)5件をはじめ、さまざまな形で研究成果を発表した。

令和3年度は、(1)国内での宗教者の寄り添い支援とそれに関わる研究者及び研究の公共性に関する実態調査(フィールドワーク)、(2)情報収集ならびに理論研究、(3)研究会の実施、(4)学会やシンポジウム・講演等での研究成果の発表や意見交換を実施した。

まず、(1)については、研究協力者の協力により、3月に東日本大震災被災地での実態調査を実施し、被災者・住民に様々な支援やケアをして来た宗教者たちが、震災の発生から11年を経てもなおその取り組みを継続している実態と新型コロナウイルス感染症の影響下新たに生じている課題を把握できた。それ以外の調査については、間接的な聞き取りなど、残念ながら不十分なものとどまらざるを得なかった。

次に、(2)に関しては、とくに新型コロナウイルス感染症の影響をはじめ、宗教者の寄り添い支援の現状に関する情報を収集してそれらの分析を行い、また、日本・韓国・台湾を中心に、社会と宗教の関わりを多角的に論じ、有効な理論の構築に努めた。

(3)については、研究会を実施し、研究協力者の渡辺順一、研究分担者の村上辰雄、研究代表者の宮本要太郎が、それぞれ研究成果の一部を発表し、出席者の間で積極的な意見交換を行った。なお、参加者は7名であった。

最後に、(4)に関しては、研究論文5件、学会等での口頭発表6件、図書(分担執筆)3件をはじめ、さまざまな形で研究成果を発表した。

令和4年度は、(1)国内の宗教者の寄り添い支援とそれに関わる研究者及び研究の公共性に関する実態調査(フィールドワーク)、(2)情報収集ならびに理論研究、(3)研究会の実施、(4)学会やシンポジウム・講演等での研究成果の発表や意見交換などを実施し、(5)成果報告書を刊行した。

まず、(1)については、在日大韓基督教会京都教会や同品川教会での参与観察や聞き取り調査を行なった(中西)、(2)に関しては、アメリカ宗教学会年次総会での情報収集と意見交換(村上)をはじめ、新型コロナウイルス感染症の影響など、宗教者の寄り添い支援の現状に関する情報を収集して分析した。また、社会と宗教の関わりを多角的に考察した。(3)については、オンライン上で研究会を実施し、金子、村上、平良、宮本が、それぞれ研究成果の一部を報告し、それに基づいて意見交換を実施した。さらに、日本宗教学会第81回学術大会において、コメンテーターに堀江宗正氏(東京大学)を迎えてのパネル発表(金子、村上、平良、宮本)や個人発表(中西)を行なった。それ以外にも、WCRP 平和研究所の研究会での研究報告(金子)、大谷大学真宗総合研究所の公開シンポジウムでの研究報告(中西)、東アジア日本研究者協議会国際学術大会での研究報告(村島)など、国内外で精力的に成果を発信した。(4)に関しては、研究論文10件、学会等での口頭発表8件、図書(分担執筆)1件をはじめ、さまざまな形で研究成果を発表した。

最後に、研究の集大成として(5)研究成果報告書を刊行したが、その中には、「第1部 現場からの問い」に8本、「第2部 理論的考察」に6本の、合わせて14本の論考を収めている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計19件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 金子昭	4. 巻 28
2. 論文標題 治安維持法体制下の天理教 大正後期から昭和初期の時局対応の言説をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 天理大学おやさと研究所年報	6. 最初と最後の頁 21 ~ 56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平良直	4. 巻 821
2. 論文標題 心とつながり（1）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 倫理	6. 最初と最後の頁 26 ~ 33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平良直	4. 巻 822
2. 論文標題 心とつながり（2）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 倫理	6. 最初と最後の頁 26 ~ 33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平良直	4. 巻 823
2. 論文標題 心とつながり（3）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 倫理	6. 最初と最後の頁 26 ~ 33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平良直	4. 巻 30
2. 論文標題 戦後初期における新宗教の台頭と大衆運動の教育・学習実践	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 倫理研究所紀要	6. 最初と最後の頁 238 ~ 259
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金子昭	4. 巻 27
2. 論文標題 天理教と国民道徳運動 明治末・大正初期の時局対応の言説をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 天理大学おやさと研究所年報	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金子昭	4. 巻 13
2. 論文標題 宗教間対話の条件と課題を再考する 2018年度テーマを踏まえ、天理教の例を通じて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 平和のための宗教 対話と協力	6. 最初と最後の頁 99-118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平良直	4. 巻 809
2. 論文標題 首里城焼失と伝統の復興・再現	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 倫理	6. 最初と最後の頁 26-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平良直	4. 巻 810
2. 論文標題 「QOL」と「健康概念」の再考(1)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 倫理	6. 最初と最後の頁 26-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平良直	4. 巻 811
2. 論文標題 「QOL」と「健康概念」の再考(2)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 倫理	6. 最初と最後の頁 26-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平良直	4. 巻 812
2. 論文標題 「QOL」と「健康概念」の再考(3)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 倫理	6. 最初と最後の頁 26-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平良直	4. 巻 29
2. 論文標題 超高齢社会における老年者ケアとQOL・健康概念	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 倫理研究所紀要	6. 最初と最後の頁 130-161
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村島健司	4. 巻 81
2. 論文標題 雑誌『季刊三千里』と日本人読者にとっての「架橋」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 関西大学人権問題研究室紀要	6. 最初と最後の頁 61-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本要太郎	4. 巻 1
2. 論文標題 公共宗教論から公共宗教学へ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 井上克人教授退職記念論文集	6. 最初と最後の頁 181,193
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金子昭	4. 巻 1
2. 論文標題 宗教者による社会参画をめぐる一つの思想的探究 幾つかの概念整理の試み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『日台韓における社会的孤立者に対する宗教者の伴走型支援活動に関する調査研究 (平成28年度～令和元年度科学研究費補助金 基盤研究 (C) 研究成果報告書』、研究代表者・宮本要太郎 (関西大学)	6. 最初と最後の頁 15,30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平良直	4. 巻 796
2. 論文標題 超高齢者の宗教性と老年的超越	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 倫理	6. 最初と最後の頁 16,23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平良直	4. 巻 866
2. 論文標題 「全体性の回復」と健康	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 新世	6. 最初と最後の頁 56,59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村島健司	4. 巻 51
2. 論文標題 帝国日本の開発と文化遺産としてのダム?戦後台湾における文化遺産の変遷と地域社会による実践を中心に?	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本研究	6. 最初と最後の頁 169,194
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 村島健司	4. 巻 10(5)
2. 論文標題 Divided Memory on Cultural Heritage of Colonial Buildings Between Local Family and Nation in Post War Taiwan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The Journal of Humanities and Social science	6. 最初と最後の頁 75,90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件(うち招待講演 4件/うち国際学会 5件)

1. 発表者名 宮本要太郎
2. 発表標題 宗教の創造 混沌(カオス)から世界(コスモス)を取り戻すために
3. 学会等名 中央学術研究所第12回善知識研究会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金子昭
2. 発表標題 東日本大震災10周年の年に宗教者による支援を考える
3. 学会等名 国際宗教同志会2021年第2回例会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金子昭
2. 発表標題 天理教災害救援ひのきしん隊の半世紀 被災地との繋がりと世の治まりを願って
3. 学会等名 WCRP日本委員会平和研究所2021年度第1回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金子昭
2. 発表標題 台湾社会におけるジェンダー意識の高揚と仏教尼僧の活躍 昭慧法師による社会活動事例を通じて
3. 学会等名 天理台湾学会第30回研究大会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金子昭
2. 発表標題 資料読解の試み 『特高月報』、『思想月報』に見る天理教
3. 学会等名 おやさと研究所第341回研究報告会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金子昭
2. 発表標題 平和の国としての神の国 シュヴァイツァーの平和論
3. 学会等名 阪神宗教者の会2021年12月定例会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮本要太郎
2. 発表標題 日本宗教における「信心」
3. 学会等名 宗教倫理学会夏季研修会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 金子昭
2. 発表標題 コロナ疫災と新宗教教団 とくに天理教団の対応とその言説について
3. 学会等名 宗教社会学の会研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 村上辰雄
2. 発表標題 宗教学者チャールズ・ロングと黒人神学
3. 学会等名 日本宗教学会学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮本要太郎
2. 発表標題 公共宗教論から公共宗教学へ
3. 学会等名 「宗教者の寄り添い支援とそれに関わる研究者及び研究の公共性に関する研究」研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金子昭
2. 発表標題 東アジアにおける平和共同体の可能性と宗教の役割 海洋という観点からみた東アジアの宗教的平和論
3. 学会等名 東亜人文社会科学研究的な地平線 人物、文化、思想、海洋興経済的交渉（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金子昭
2. 発表標題 WCRP日本委員会平和研究所の活動について
3. 学会等名 天理大学おやさと研究所第322回研究報告会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平良直
2. 発表標題 宗教学の公共性
3. 学会等名 「宗教者の寄り添い支援とそれに関わる研究者及び研究の公共性に関する研究」研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村島健司
2. 発表標題 台湾へと渡った「孤軍」と雲南少数民族：清境地区における記憶の継承と再創造をめぐって
3. 学会等名 国際シンポジウム「ポスト帝国における文化権力と東アジア：人の移動と記憶」（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村島健司
2. 発表標題 台湾における日本植民地期建造物の文化遺産化と戦後の記憶
3. 学会等名 国際シンポジウム「ポスト帝国の文化権力とヴァナキュラー」（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村島健司
2. 発表標題 台湾における植民地建造物の文化遺産化と家族の記憶：東部官営移民村跡を事例に
3. 学会等名 東アジア日本研究者協議会第4回国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計11件

1. 著者名 災救隊結成50周年記念大会実行委員会編（金子昭：全面執筆協力）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 天理教災害救援ひのきしん隊本部	5. 総ページ数 123
3. 書名 天理教災害救援ひのきしん隊 50年の歩み	

1. 著者名 松本亜紀、丸山貴彦、寛ボルテール、平良直、水野雄司、内田智士、高橋徹	4. 発行年 2021年
2. 出版社 倫理研究所	5. 総ページ数 362
3. 書名 心と体	

1. 著者名 桐ヶ谷章、吉澤五郎、河合秀和、石神豊、井上大介、大西克明、岸・ツグラッゲン・エヴェリン、春日潤一、平良直、満田剛	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東洋哲学研究所	5. 総ページ数 358
3. 書名 文明・歴史・宗教	

1. 著者名 天理大学おやさと研究所編（アミーラ・ダリ、稲場圭信、岡田正彦、金子昭、金子珠理、小原克博、佐藤浩司、佐藤孝則、澤井義次、島園進、園田稔、竹村牧男、辻井正和、萩原幹子、華谷俊樹、早淵百合子、深谷耕治、堀内みどり、本田真、森洋明、八木三郎、吉澤正人	4. 発行年 2021年
2. 出版社 学术研究出版	5. 総ページ数 272
3. 書名 エコロジーと宗教性の深化	

1. 著者名 村上辰雄、チャールズ・ロング、デイヴィッド・チデスター、フィリップ・アーノルドほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 University of New Mexico Press	5. 総ページ数 335
3. 書名 With This Root About My Person: Charles H. Long and New Directions in the Study of Religion	

1. 著者名 谷富夫・稲月正・高畑幸・西田芳正・内田龍史・堤圭史郎・文貞實・妻木進吾・渡辺拓也・八木寛之・西村雄郎・野入直美・上原健太郎・藤澤三佳・西村いずみ・秋風千恵・二階堂裕子・近藤敏夫・川本綾・伊藤泰郎・中西尋子・吉田全宏・山本かほり	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 440
3. 書名 社会再構築の挑戦 - 地域・多様性・未来 -	

1. 著者名 高尾賢一郎・後藤絵美・小柳敦史・帯谷知可・奈良雅史・丸山空大・森田豊子・上原潔・岡本亮輔・和崎聖日・海野典子・碧海寿広・高岡豊・辻上奈美江・石黒安里・山本繭子・シュールター智子・鳥山純子・問芝志保・麻生美希・竹村和朗・谷憲一・中西尋子・西川慧・青木良華・飯田陽子・朝香知己	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 356
3. 書名 宗教と風紀	

1. 著者名 南根祐・丘永逸・岩本通弥・姜成宇・島村恭則・安德明・丁秀珍・金禎夏・村島健司・川松あかり・李相賢・李鎮教ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 翰林大学日本学研究所	5. 総ページ数 503
3. 書名 文化権力とヴァナキュラー	

1. 著者名 木岡伸夫編（宮本要太郎：分担執筆）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 萌書房	5. 総ページ数 208
3. 書名 <縁>と<出会い>の空間へ 都市の風土学12講	

1. 著者名 倫理研究所編（平良直：分担執筆）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 倫理研究所	5. 総ページ数 428
3. 書名 倫理文化研究叢書 自然と人間	

1. 著者名 翰林大学日本学研究所編（村島健司：分担執筆）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 小花出版	5. 総ページ数 352
3. 書名 文化権力：帝国とポスト帝国の連続と非連続	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	金子 昭 (Kaneko Akira) (90214452)	天理大学・付置研究所・教授 (34602)	
研究分担者	村上 辰雄 (Murakami Tatsuo) (80407337)	上智大学・国際教養学部・准教授 (32621)	
研究分担者	平良 直 (Taira Sunao) (40334015)	八洲学園大学・生涯学習学部・非常勤講師 (32722)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	村島 健司 (Murashima Kenji) (60707511)	関西大学・人権問題研究室・委嘱研究員 (34416)	
研究分担者	中西 尋子 (Nakanishi Hiroko) (80881177)	大阪市立大学・大学院文学研究科・都市文化研究センター研究員 (24402)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関